
闇の世界の物語

喜怒哀楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の世界の物語

【Nコード】

N3075L

【作者名】

喜怒哀楽

【あらすじ】

あるホームレス青年が闇の世界の中少女を助けたことでこの話は始まる。

現実と非現実の境目で青年は何を思い、何を誓うのか？

これは闇と罪と償いの物語。

ちよつとした思いつきで書いてみたオカルトファンタジー

1 闇との出会い

1 闇との出会い

俺は龍宮淨化^{りゅうぐうじようか}。

龍宮城か？ではない。

高卒で、何年か路上で生活している。

両親は3年前に死んだ。

生命保険金も通帳もなく、叔父の家で暮らしていたが、高校卒業して縁を切った。

叔父はまともな飯も食わせず、なにか悪いことがあるたびに殴ってきたからだ。

そして今、俺は路頭に迷っている。

「あゝ、いい儲け話でも転がってねえかな」

しかし、現実は厳しい。

そんな簡単に金は手に入らないことを俺は人一倍知っている。

今日も深夜のアルバイトを終えてどこかの公園で野宿する。

ただし、ホームレスがいないところだ。

俺はあそこまで堕ちたくない。

俺は人の居ない公園のベンチに目を付けてそこで眠った。

――――

「ふう、今日こそ…」

少女は黒い箱を見ながらそう嘆く。

その少女に両親はいない。

だが、莫大な財産はある。
父は大手の大会社の社長、母は有名なデザイナーだった。
今少女は一人、豪華で広い屋敷に住んでいる。

「そろそろ行きましょうか」

深夜、少女は家を出る。
黒い箱を手にとって…。

――――

「さて、始めましょうか」

声が聞こえた。

あれ？ここは、確かベンチの上で寝たはずなんだけど。
いつの間にかベンチの下に居る！
我ながら寝相が凄まじいな。

「誰も居ないみたいだし」

声の主は少女のようだ。

まだあどけなさを残す顔…高校生だろうか？
だが、こんな夜中になぜ公園にいるのか？

疑問はたくさんあったが、面倒なので目を瞑って眠ろうとした。

「よし。ブラックボックス…開」

な、なんだ！！

少女が言葉を発した瞬間、少女の周りの空間が闇に包まれる。
いいや違う。闇に飲み込まれている…と言ったほうが正しい。

どんどん闇が俺に近づいてきている。

「うわっ…」

目を瞑った瞬間、俺は闇の中に取り込まれていた。
そして、気づいて見たら公園全体が闇に包まれていた。

「これは夢か？」

非現実的な光景に、ついそんな言葉を言ってしまった。
少女の方を見てみると、この闇の中から黒い霧のようなものが
集まり、だんだんと人のような形を成していく。

「来たな闇人！」

「ガ：ガガ」

人の形をした影のようなもの。
全身は黒いが目だけは赤く光っている。
狂気に染まった目。
あれは人間なのか？
闇人と呼ばれる者は大きく、手は刃で出来ている。
そんなものが少女と対峙する。
どう考えても危険すぎる。

「ガァァー！！！」

奇声を上げ、闇人と呼ばれるものは少女へ襲い掛かる。
少女は軽いステップで闇人から離れた。

「サモン・アイテム！」

少女は何かを叫ぶ。

すると、少女の手にいつの間にか剣が握られていた。
非現実的でやはり夢にしか思えない。

「消えなさい」

少女は剣を振るうわけではなく、闇人に投げつける。
その剣は闇を切り裂き、真っ二つになった闇人はすぐに消滅していった。

「ふう、終わったわね」

まずい！

少女はあの闇人を倒し油断をしていたのだ。
俺はその時少女の後ろで闇が瞬くのを見た。

少女が今、危険にさらされている。

いくら夢だからって少女を見殺しになどできない。

だから、瞬時に俺は走り出した。

闇は少女の後ろで人の姿を成し、背後から襲い掛かろうとする。
少女が俺の方に振り向き、驚いた顔をする。

それでも少女は闇人に気づかず、刃の手は徐々に近づいている。
なりふり構ってられないので、俺は少女に突進した。

「きゃあ！」

「うわあ！」

俺と少女は吹っ飛んだ。その瞬間、闇人の手が空をきった。
ぎりぎり間に合ったのだ。

「いたたた、なんでこの空間に人が？」

「急に突き飛ばして悪いが、まずこの状況：なんとかしようぜ。」
「え：なにこれ：。」

俺の顔はきつと少し青かっただろう。

いつの間に、闇人たちが俺と少女を包囲していたのだ。

周りを取り囲む闇人は少なく見積もっても10体以上いる。

これが噂に聞く絶体絶命ってやつか。

絶体絶命、まあ絶対死んじまうってことじゃないが：これは死ぬんじゃないだろうか？

いくら夢だからって死ぬのは御免だな。

「で、どうするよ幼き少女、略して幼女」

「私のどこが幼女に見えるのよ！」

「胸とか？」

「殺すわよ。ってよくこんな状況でそんなこと言えるわね」

「大丈夫これは夢だから」

パシン

少女は俺にビンタする。

「痛い！」

「これでも夢？」

「痛みを伴う夢もあると、どこかで聞いた」

「リバース・アイテム」

少女がそう言うと、さっき闇人に投げた剣が少女の手に戻る。
そしてその剣を俺の喉元に軽く置く。

「貴方が夢だと言うのならその首切ってしまいませんか？」
「止めてくれ〜！」

剣の質感、冷たさ、それはもう現実であると認識するしかなかった。

「貴方が生き残る術はたった一つ、この闇人たちを全滅させるしかないのよ」

「いや、無理だって。」

「貴方ならきっとできるわ、サモン・アイテム」

また少女は剣を出し俺に渡す。

「貴方は正面の敵を倒して私は後ろの敵を倒す、理解できた？」

「わかったよ。でも貴方っていうのやめねえか。俺には龍宮浄化っていう立派な名前があるんだからよ」

「ふっ、どこかの亀を助けて海の中の城へ行く物語から取ってきたような名前ね」

「俺の名前は龍宮城か？、じゃなく龍宮・浄化、だ」

「ふっ、私は烏靴白姫よ」

「お前だって魔法使いにお姫様にされる物語から取ったような名前じゃねえか。」

後その鼻で笑う癖止めとけよ、人から嫌われるぞ」

「余計なお世話。チッ、もうおしゃべりはおしまいね。来るわよ」

白姫は闇人に剣を投げつけ消滅させていく。

数が多いが一体一体の力はなく、一回切れば消滅してくれるみたいだ。

俺は白姫のように剣を投げても手元に戻るなんてマジックはできない。

だから、この手に剣を持ち振り回す。
闇人の攻撃は単純なので大したことはない。
なんだか爽快系のアクションゲームのようだ。

「どりやりやりやー！」

俺の無茶苦茶な剣さばきを見よ。
ばっさばっさと切っていき最後の一匹。
切りかかろうとした…が瞬時に後ろに下がっていた。

あれは相手にはいけない。
相手にしたら死ぬぞ…という本能が、俺の行動を止めた。

「あれが最後の一匹ね。たくさんいたけど意外と楽勝だったわね、
包囲されたときはちょっとびっくりしたけど」

「あの最後の奴は近づいてはいけない」
「何言ってるの？ 闇人を完全に倒さないとこの空間からは出られないわよ」

白姫はこの殺気と凶悪な何かを感じないのか。
俺にはわかるのに。

「後たった一匹だし、さっさと倒すわよ」

白姫は剣を最後の闇人に投げつける。

ガキン

その剣は闇人に当たることはなく途中で折れた。

「え…嘘…」

「まずいな」

その闇人は黒い剣を持っていた。

その剣で白姫の剣を折ったのだろう。

闇人は白姫を敵と判断しこちらに向かってくる。

このままでは多分両方死ぬだろう。

それなら…

「白姫、悪いな。……」

「えっ」

俺は白姫を突き飛ばし、その闇人と対峙する。

「闇人！俺が相手だ！」

俺は大声で闇人に叫び、視線をこっちに向けさせる。

俺も正気が狂ったか？

剣を折るような怪物に挑むなんて。

「貴様ニ何がデキル？」

「なっ、お前しゃべれたのか」

「力も持たヌ貴様ニ、何がデキル？」

「俺の言葉は無視かよ。それに何ができるって、そりゃあお前を倒すことだよ！」

ガキン

俺の剣と闇人の剣が交わる。

さすがに重い。

たった一撃剣を打ち合わせただけで体が壊れそうになる。
骨が軋む音がする。

死の恐怖が襲い掛かる。

自分がこの狂気の塊に飲まれそうになる。

ガン ガキン

剣を持つ手は剣戟の衝撃でしびれて何も感じない。

それでも剣を振る。

死なないために…いや、勝つために。

ガン ガン ガキン

全身が痛みを感じる。

体から血が流れる。

自分の心臓の音が大きく聞こえる。

だが、生きるという強い思いを込めて剣を振るう。

「はあ、はあ、はあ…」

「貴様ハナゼ死ナナイ？ コノ圧倒的ナ力ノ差デ」

「お前、知らないのか？ 人は、生きることをあきらめた時に死ぬんだよ！」

「戯言ヲ。ナラバ・・・今ココデ死ネ！」

黒い剣が俺を切り裂こうとしている。

俺はニイ、っと笑う。

死ぬ瞬間だから笑うのではない。

その笑みは、この戦いが終わるから笑ったのだ。

「何ヲ笑ッテイル？」

「ああ、そんなことよりお前・・・上見てみろよ」
「ナ、コレハ！」

闇人の頭上には巨大な斧の刃があった。
その大きすぎる刃は、確実に闇人を真っ二つに切り裂くだろう。

「死ぬ前に言う言葉は？」

「マダダ、マダ終ワツテ・・・」

ドズーン

斧は終わりの言葉を言う前に闇人を両断し、それは消滅した。
俺は・・・いや俺たちは、この戦いに勝利したのだ。

――――

「もう、こんなにボロボロになっちゃって・・・」

白姫の言うとおり俺の体は無数に剣の切り傷があった。
致命傷がなかったのが不思議なくらいだ。

「ハハッ、小さい時から運だけは強いんだよ俺」

「龍宮があんなことを言い出すから死ぬ気なのかと思ったわよ」

俺は白姫を押し飛ばす前に考えた作戦を伝えた。
それは「俺が時間を稼ぐから何とかしろ。」みたいな感じだ。

「でも生きてたよ」

「私の攻撃が一步遅かったら死んでたじゃない！」
「いやー、しかしまだ闇が無くならないな」

「話を逸らすな！って本当ね。いつもならもう消えてもいい頃なのに」

闇の兵士を倒して、5分程経ったが周りはまだ闇に包まれていた。

「まだ闇人が居たりして…」

「いいえ、気配も姿もないし、それはないんじゃないかしら」
「うわー！！」

急に大きな声が聞こえた。

「何だ！？」

「まさか…闇人！？」

声が出ていた方を見してみる。

そこには小学生位の子どもが居た。

「僕たちの獲物がいないー」

「なんだ」

「お前らだなー。僕たちの獲物を取ったのは、許さないぞー」

「なんなの一体？」

「行くぞー、サモン・ドラゴン！」

子どもの後ろの空間が歪みだし、中から異質な空気を纏った竜が現れる。

白銀の鱗、刃の翼、大きな体躯、そして鋭い目は俺たちを睨みつけていた。

「冗談だろ」「冗談でしょ」

「お前らなんて、けちよんけちよんにしてやる」

一難さってまた一難。

俺は今日何度死ぬ目にあうのだろうか？

「止めろ龍影！」

どこかの叫び声で子どもがビクツツとする。

「今度はなんだ？」

闇の中から現れたのは、学生服を着た長身の、中学生くらいの少年だった。

「すみません、弟が迷惑をかけてしまつて。私は月影光影と言います。用事が終わったらすぐ帰りますので…」

「兄貴ー。こいつら僕たちの獲物取ったんだぜー。だから痛めつけてやらないとー」

「なっ、あれを倒せるとは・・・なかなかの腕の持ち主のようですね。まあ、とりあえずこの空間を消しましょう」

ピカッ

闇の中心がまぶしく光り、目を開けるといつもの変わらない公園の風景に戻っていた。

同時に異質な龍も消えていた。

「貴方は一般人…ですか？」

「俺か？ああ、そう。俺はただの一般人」

「やはりそうですか。貴方がここにいるのはおかしいと思ったも

ので。

しかし：いえ、やはり何でもないです。それでは、また縁があればまたお会いしましょう」

「えー、帰るのー」

「ああ、さっさと帰るぞ」

「はーい」

少年は最後に形のない言葉を残して去っていった。

後に公園に残されたのは、呆然と立っているホームレスと少女だった。

2 お嬢様とホームレス

2 お嬢様とホームレス

そこには大きな屋敷が建っていた。
土地も半端じゃない。

一瞬で金持ちだと理解した。

まあ烏靴白姫の家なのだが、まずこの家にきた理由を説明しておこう。

――――

月影兄弟が去って、俺たち二人が残された後、俺は今日の事を忘れようと寝床へ戻った。

もちろん寝床とは公園のベンチだ。

「これは夢だ。忘れて寝よう」

「ちよっ、龍宮。何してんのよ!？」

「何って。寝るんだよ」

「ここで?」

「そう、ここで」

「ジョークよね?」

「いや、マジだが」

「龍宮ってもしかしてホームレ…」

「ホームレスなどでは断じてない!!」

勢いよく立ち上がり、大声を出してしまった。

まあホームレスなどと一緒にされては困るからな。

「それじゃあ帰る家は？」

「ないが、文句でも？」

「ホームレスじゃん」

「ノオー！ー！！」

俺は忘れていた。

俺には帰る家がない。ホームレス！

「ハ、ハハ。俺って・・・ホームレスだったんだ・・・」

「いや、急に死んだ魚のような目をされても困るんですけど・・・」

「おかしいとは思ってたんだ・・・ずっと。でも、ホームレスじゃないって・・・信じたかったな」

「い、いや。何この急なシリアスは？ 困るんですけど・・・」

「もういいんだ。俺のことは・・・。こんな帰る家のない社会の

ゴミはほっといてくれ」

「そこは否定できないけど・・・」

「できないのかいっ！」

「でも、そうね。龍宮も私も助かる方法があるわよ」

「え！？」

という訳で、烏靴白姫の家に訪問することになった。

――――

「・・・ってことよ」

「ほう。つまりだ。等価交換って奴か？」

「まあそうゆうことね」

その内容は深夜に闇人退治をする代わりに、

この屋敷の一部屋とお金をくれる、というものだった。

「つまり、貴方はホームレスから抜け出せて、私にもお得な条件
ってわけ」

「ホームレスから抜け出せる…」

「そう、ホームレス解放よ」

「ホームレス解放：乗った、乗ったぜその話！」

「それならこの署名にサインして」

「ああ。わかったぜ！」

ササッとペンで署名にサインする。

「龍宮浄化つと。サインしたぜ」

「龍宮浄化、貴方との契約は成立しました。今後ともよろしく」

「おう。よろしくー」

ほぼノリで書いてしまったこの契約書。

まあ、戦いの日々が幕を開けたのだ。

――――

「兄貴ー、本当に良かったのかー」

「まったく、終わったことはもう忘れなさい」

今日の闇人の討伐中に二人の人物に会った。

一人は佇まいのいい少女。

もう一人は少女とは正反対の服装の汚い男。

弟はその二人をまだ根に持っているようだ。

「ええ、しかし、あれを倒すとは…」

「そうだねー、あんな強い人がいるなんて」

「まあ、龍影ほどではないけどな」
「そりゃあそうだよー」

普通闇人が複数体出現することなどほとんどない。

だが、最近はそれが頻繁に起きている。

そして、闇人達を率いる存在。

高位闇人と私たちは呼んでいるが、その高位闇人は闇人よりも遥かに強い戦闘能力を持っている。

この異常な現象を調べているうちに、その答えとなるものはあった。

悪魔

この世の悪魔の封印が解けかけている。

それを何とかしなければ世界は闇に包まれてしまうだろう。

「兄貴ー！」

「おっと、どうしたんだ大声出して？」

「兄貴何にも反応しないからだよー？」

「ああ、少し考え事をしていてな」

「ふーん」

まずは強い能力を持った人間に手を借りなければ。

先ほどの二人はまだまだ発展途上だ。

戦闘を繰り返せばもっと強くなれる。

「さーて、次は誰の元へ行くでしょうかね？」

光影は闇にそう尋ねた。

今日も兄弟は力のある人間を求め続ける。
悪魔を倒すために。

――――

「ふうー、いい朝だ」

俺は白姫の家のふかふかベットで朝を迎えた。
この部屋はどうやら白姫のお父さんのらしい。
書斎のようで、難しそうな本がたくさんある。

「あら、早いわね」

「もちろん、路上生活は早寝早起きが基本だぜ」
「そ、そう」

白姫は少し引いている。
何か変なこと言ったわけ？

「まあいいけど。それより朝ごはん作ってくれない？」
「え、何で俺が？」

「契約書に書いてあるでしょ」
「へえー、そうなのか。それならお安い御用だ」

契約書に書いてあるんだっただけ仕方ない。

俺は白姫家の冷蔵庫から適当に材料を選んで作った。

「はいどうぞ」

俺が作った料理はベーコンエッグとサラダだ。
後にご飯を添えてできあがり。

「うん、まずくはないわね」
「そりゃあな」

汚い食事屋でバイトしたこともあったから、料理は少しだけ出来た。

すぐに朝ごはんは食べ終わった。

「龍宮は家でゆっくりしていいわよ。昨日のこともあるし」
「うん、わかった。白姫は？」

「学校へ行くわ。四時ころ帰ってくるから」

「へえー、わかった」

「昨日の説明は帰ってきてからするから」

「闇人って奴のことか？」

「一緒に戦うから知ってて当然のことは知らない」と

「ふーん。んじゃ、行ってるらしい」

「ええ、行ってくるわ」

白姫は学校へ行ってしまった。

でも、家でゆっくりしてろって、何すりゃいいんだろ。

龍宮はとりあえず「本でも読むか」と思いつき書斎へ向かった。

— — — — —

「ちょっと龍宮」

「ん…ここはどこだ？」

「寝ぼけてるの？」

あ、そうだ。

俺は本を読んでいるうちに寝てしまっていたのか。

「へえー、本読んでたんだ」

「急に何かしろって言われてもわからんからな」

「で、どんな本？」

「ああ、何だか剣やら刀やらの本が多くてな。それを読んでたんだ」

「父はそうゆうのが好きだったから、今も刀蔵があるわよ、見る？」

「マジか。そうゆうの一度見てみたかったんだよ。案内してくれ」
「いいわよ」

この家は都会から少し離れた場所にある。
都会の中心部までバスで1時間ほどだ。

敷地は広く、家全体は塀で囲まれていて、
塀の中には庭園とか池とかたくさんの木とかがある。
その敷地の一番奥の端辺りに刀蔵はあった。

「すごいな」

俺は驚いた。

刀蔵には1000本を軽く超えるくらいの剣や刀があったからだ。
だ。

しかもきちんと分別されていてわかりやすい。

「奥に行けば行くほど作られた年が古くなるわ」

「へえー、まさかここに草薙の剣があったりしてな」

「草薙の剣？」

「平家が持ってたって噂されてて、未だに見つかっていない伝説の剣なんだ」

「ふーん、古いなら奥の方探してみたら？もしかしたら見つかる

かもしれないわよ」

「んじゃ俺はお宝探しても始めますか」

「頑張ってね。後、暗くなったら戻ってきてね」

「ああ、そうするわ」

案内してくれた白姫は家に帰った。

さーて、始めますか。

俺は伝説の剣を探し始めた。

――――

「どう、伝説の剣は見つかった？」

「いや、見つからなかった。ただ、気になる剣を見つけた」

俺は白姫の言われた通り奥に狙いを絞って探していた。

その無数の剣の中の一本が無性に気になって持ってきてしまっていた。

「それがその剣ってわけ」

「そうなんだ。作った人も書いていないし、どこで買ったのか、どこで作られたのか、いつ作られたかもまったく書かれてない」

「整理がきちんとされている刀蔵で？ 珍しいわね」

「ああ、これ以外はほとんどそういうことは書かれてた」

そうだ。あの刀蔵は素晴らしいほど整理されていた。

その中でこの一本のみ情報がまったくくないのだ。

「それが気になったの？」

「それだけじゃない。見てみる」

俺は剣を鞘から抜こうとする。
だが、その剣が鞘から外れることは無かった。

「なっ、変だろ。抜けないんだよ、剣が」
「確かにおかしいわね」

抜けない剣は剣としての意味を為さない。
俺はこの剣は一体何なのかを知りたくなったのだ。

「だから、俺はこの剣を少し調べて見ることにする。
資料は山ほどあるしな」

「まあ、暇つぶしには丁度いいんじゃない」
「だろ」

「でももうこんな時間よ。さっさと晩ご飯を作って」
「お安い御用よ」

確かにもう七時になる。
ぱぱっと俺は夕食を作った。
ご飯は炊けていなかったのでパスタにした。

「ミートソーススパゲティーだ」
「うん、なかなかおいしいじゃない」
「自分が作った料理が相手に褒められるほど嬉しい事は無いぜ」

白姫は俺特製のミートソース（インスタントではない）を勢いよく食べた。

「あ、そうだ。丁度いいし今闇人について話すわね」
「あの化け物か。なんなんだあれは？」

「そうね。簡単に言えば人間の狂気の塊ね」

「狂気の塊？」

「人は誰しも心の中には狂気という悪魔が潜んでいるの。

誰かがそれを消さないと、溜まった狂気は行動に移されて、殺人や猟奇事件に発展することだってある。

その狂気を吸収するのがこのブラックボックスってわけ」

そう言って白姫は黒色の箱を見せる。

「これがそうか？」

「そうよ。これがブラックボックス。これに狂気を封じるの」

「つまりだ。おおまかに言えば、ブラックボックスは人間を助ける仕組み、てわけか？」

「そう…ね。その通りよ」

人を悪へと堕とさないために誰かが作った仕組み。

俺はそう認識した。

ただ、白姫が返事した時の悲しそうな表情が、少し気にかかった。

だから、もう問いたださないことにした。

2 お嬢様とホームレス（後書き）

考えていることなんて現実にはできない。

b
v
喜怒哀楽

3 闇の住人

3 闇の住人

時刻は深夜二時。

俺は昨日の公園へ向かっている。

もちろん。あの化け物、闇人を滅するためだ。

俺はずっと抜けない剣について調べていたが、まったく資料が見つからない。

そんなこんなで結局深夜まで起きてしまっていた。

白姫は仮眠を取ったらしいけど。

「そういや何で公園に行くんだ？家でもいいだろ」

「そうね。いつも行っているからだと思う」

「誰かを待っている、からか？」

そう言った瞬間白姫はこちらを向いた。

「察しがいいわね。探偵にでもなったら？」

「やっぱりな」

俺は白姫は昔公園で誰かと共に戦っていたかもしれない。
その考えは的中した。

「そのことについては今は話したくないわね」

白姫は顔を俯けた。

「でも、いつかは話すわ。その人のことも、能力も」

「能力？」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「聞いてない」

「そ、そう。大事すぎて忘れてたわ」

大事なことを一番最後に聞くってどうなんだろう？

「能力っていうのはブラックボックスを手にした瞬間から得られるものなの。」

種類は大まかに分けて3種類あって、肉体強化系、召還系、特質系に分かれるわ。

最初の二つは文字の通りで、特質系はそれ以外って感じかな」

「白姫の能力は？」

「昨日も見せたとおりの召還系よ。でも私のは少し特殊で、この世の全ての道具を

三つまで召喚できる。そういう能力なの」

「すげえなそりゃ。銃とか使えば最強じゃん」

「銃作っても弾が無いんじゃないでしょ。私の能力は万能じゃないのよ」

「だから剣か」

「ええ、実際に見た物の方が召喚しやすいから。刀蔵の名剣を召喚したりね」

「あれ？それなら刀蔵の剣を持ってくればいいじゃん」

「それは無理ね」

「なんで？銃刀法違反だから？」

「それもあるけど。闇人に対抗するには私が召喚したものでないと駄目なのよ。」

闇に対抗するには光の力が必要。だけど光の力を持った物なんて世界にはほとんど存在してない」

「つまり召喚したものは光の力が宿っている、という事か」

「その通りよ。ついでに言っておけば、この能力はブラックボックス内でしか使えないから」

まあ、使えてしまったら世の中おかしくなるだろう。

しかし、マジックではなかったのか。

まあ、白姫の能力はわかった。

この能力なら確かに、一人より二人の方が戦いが有利になる気がする。

戦闘の幅も広がるだろう。

白姫の前のパートナーも気になるが、そろそろ公園に到着する。

白姫の家から公園までは結構近い。

近いといっても十分はかかるけど。

都会から中途半端に離れている所にある白姫の屋敷は周りにほとんど店が無く、他の家も少ない。

都会に行く唯一のルートは、何時間かに一回だけのバスのみだ。

「着いたわね」

公園は静かで人ひとり居なかった。

こんな深夜にいても困るが。

「龍宮、目を瞑って。開くわよ」

言葉の通り目を瞑る。

数秒後には視界に写る世界は変わっていた。

「やっぱり、夢じゃねえんだな」

「当たり前でしょ。この闇に包まれた世界はちゃんとした現実よ」

確かに周りに公園がある光景は現実のものに変わりない。
ただここを現実と呼ぶには少し違和感があった。
なんだか別の世界に居るような…

「すぐに闇人は来るわ。けど期待するほど強くはないわよ。

あまりブラックボックスは黒に染まってないから」

「でも油断はしちゃいけないと」

「そうね。貴方は自分の命だけ考えなさい」

「はいはい」

そして黒い闇が集まり始めた。

その闇は人の形を成してい…かずに拡散した。

「…」

「…」

あれ？どうなってんの。

闇人って奴が出てくるんじゃないの？

「何にも無いな」

「前言撤回ね、やばいのが来るわよ」

「え…」

一瞬理解が遅れた。

闇が拡散したから物凄く強い奴が現れるということなのか？

スタ スタ スタ

足音が聞こえる。

もちろん俺や白姫のではない。

それならこの足音は。

「闇を身に纏った人、私は闇の住人と呼んでいるわ」

そこには、黒い気を纏っている赤い目の人間がいた。

「オオオオオオオオオー！」

闇の住人は叫ぶ。

その声は悲鳴の様にも聞こえられる。

「闇の住人。この闇の世界で死んだ人間の成れの果てよ」

「つまり、元人間か？」

「そうなるわね」

人間。その言葉が俺に重くのしかかる。

倒して…殺してしまってもいいのか？

「どうするんだ？」

「何言ってるのよ。もちろん滅するわよ」

「でも動いて、生きているんじゃない？」

「違うわ。あれは闇人に憑かれているだけ。目が赤く光っているのが見えないの？」

「でも…」

「ふう。いい、ここで死んだ人間の魂はここからは出られないの。私たちが外の空間へ開放させるまで。」

だから、滅することが助けることに繋がるわ」

「そう…なのか…わかった」

俺は白姫の言葉で吹っ切れた。

「さあ、いくわよ。サモン・アイテム、螺旋剣・鶴義！」
らせんけん つるぎ

白姫はさっそく剣を出す。

その剣は奇妙な形をしていた。

渦が巻いているように、二本の螺旋状の剣が交差している。

ガキン

金属音と共に、その剣は二つに分かれた。

何かに掛ける剣だったのだろうか？

よく見てみると持ち手の部分には手が入るほどの穴があいている。

「元々は鑑賞用の剣なんだけど、戦闘にも使えるわ」

ほいつ、と白姫が一本の螺旋剣を投げたのでキャッチする。

剣はシンプルな作りながら美しく、握り具合も丁度いい。

その剣の刃には「鶴義」の銘が入っていた。

「前使っていた剣よりは光の力は落ちるけど、一つで二本の剣が得られるってとこがいいわね」

「確かにな」

「オオオオオオォー！」

闇の住人は二度目の叫びを上げる。

それは戦闘開始の合図でもあった。

ダダダダダ

闇の住人はこちらに走ってくる。

「おい！闇の住人こっちくるぞ。どうすんだ？」

「自分で言い出してなんだけど、闇の住人って呼ぶのめんどくさいわね。」

あいつの特徴は：よし、リュック背負ってるからサックと命名するわ」

「……」

このネーミングセンスの無さ。

闇の住人も誰かが言ってたものを真似したんだ。

いや、そうとしか考えられない。

って、余計な事考えてる間にサック（白姫命名）が目の前まできている。

「おいっ！」

ズバッ

身を守ろうと反射的に体が動いた。

そして、螺旋剣が敵の腹を一閃した。

だが、剣は皮膚にさえ通らなかった。

身体能力強化系、不意に頭に浮かんだ。

「あ、そうだ。闇の住人になっても人間の時の能力が使えるから気を付けてね」

先と言えええー！！

と突っ込みをする余裕はない。

とりあえずサックを蹴り飛ばした。

「うん。大体わかったわね。サックは身体能力強化系でも防御に特化してる。

その代わり攻撃力が弱いわね。まあ、時間を使えば簡単に勝てるわ」

「で、俺はどうすれば？」

「時間を稼いで、前みたいに。まあ前よりかは簡単だと思うわ」
「わかった、任せろ」

俺はサックとタイマンでやることになった。

だが、俺はまだ気づいていなかった。

サックの本当の能力のことを。

俺はいつでも攻撃を対処できるように剣を構えた。

白姫は俺とサックから距離を置いた場所にいる。

「来いや！サック」

「オオオオオォー！」

サックが向かってくる。

ん？少し…少しだけサックの速さが速くなっている？

さっきは手加減をしていたのか。

もちろん俺の気のせいかもしれない。

とにかく向かってきても対処は簡単だ。

こっちは武器を持っていて、サックは素手。

武器を持っている方が十倍有利に戦える。

ズバツ ズバツ

さっきは反射的な行動であったが、今度は思いつきり剣を振っ

た。

相手の動きを止めるため、足を集中して狙う。
だが、さすがに硬い。

血は少し出るが、それだけだ。

「ちっ」

俺はすかさずサックから離れた。

何か…何か違和感がある。

そして先ほどは血すら出なかった頑丈さだったのに…

ただ、思い切り剣を振らなかったからなのか？

くそ、考えがまとまらない。

「オオオオオォー！」

サックはさらに速くなっている。

なぜ速くなっているのか。

これが二回目だ。一回目との共通点…それは…

「そうか、わかったぞ。お前の能力が。お前は傷を付けられる度に力が増していく、

それさえわかれば俺はお前を攻撃しなければいいんだ！」

「ク、ククク、なかなか頭の切れる男だな」

「話せるだろうと思っていたよ。お前は俺たちを常に観察していたみたいだったしな。

それが違和感として感じていた真相だ」

「クク、そうか。だが、説明に一つ誤りがあるな」

「何！？」

「確かにダメージを受ける度に戦闘能力が増す。だが、防御の能力が失われていく」

「なっ！」

なんだその能力は…おかしいにも程がある。

「クク、おかしいと思っただろう。俺も最初は思ったさ。

けどこの闇の世界で確信したよ。考え方を変えれば最強の能力ってことに」

サックは、スッ、とリュックから何か取り出す。

「それは…スタンガン？」

「闇人には通用しなかった。だが…」

スタンガンは危険だ。

当たってしまったら数分間戦闘不可能になる。

そうなってしまったら確実に殺される。

だが、俺の考えていたことは数コマ先には完全に消えていた。

なんとサックは自分にスタンガンを当てたのだ。

バチバチ ヒュン

光る電撃の瞬間…サックは消えた。

これは…まさか。

「そのまさかだよ」

サックは俺の背後に移動していた。

瞬間移動などではない。

超高速移動で…

「確かに、電撃なら一瞬だけ凄まじいダメージを受けれる。

そんな電撃を体に受ければ普通体は硬直する、けど

お前は能力に変換できる、ってわけか」

「そうだ。別に切り傷を付けるだけがダメージではないからな。

そして、わかったところでお前に勝機はないぞ」

肉眼では見えないほどの速さ。

一体どれほど強くなっているのか想像もつかない。

ただ、これだけは言える。

絶対勝てねえ：

4 四劍之壺

4 四劍之壺

「俺はお前たちのような存在に会えることをずっと楽しみにしていたよ。」

地獄のようなこの闇の世界でただ何かを求めて歩く俺たちの気持ちがお前にわかるか？

辛かった…苦しかった…だが、ようやく終わる。お前たちを殺して俺は外へと出るんだ！」

哀れな主張。

死んでいるという事実は絶対に変わることは無い。

俺たちを倒し、外へ出ても待っているのは何も無い。

あるとすれば自分自身の死体だけだろう。

「少し教えてやろう。俺は最初から全力を見せなかった。

それはお前たちの能力を見極めるためだ。

女の方はわかったが、お前はわからない？

お前の能力は一体なんだ？教えたら楽に死なせてやる」
「お前に言う必要はない！」

俺に能力など存在しない。

だけど、今はハツタリを言うしかない。

「クク、そうか。ならじつくりと死ね」

バチバチ

サックは消える。

ドゴッ

腕に何かが当たった。

これは…石だ。

超高速で石を投げつけてきた。

奴はそうとう慎重深い。

これなら本当にじっくり死ぬかもしれないな。

ドゴッ ドゴッ

頭に当たったな。次は背中か。

体中がすごく痛い。

俺にはもう何もすることはできない。

できることは、ただじっと待つことだけだ。

「どうした？抵抗せずに死ぬか？」

メキメキ

この音は…

でかい木が…折れている。

「動こうともしないか…なら、死ね！」

サックはその木を投げてきた。

確実に避けられないだろう。

でも…

「まったく、遅すぎだ」

「ちよつとやる気だしちゃってね」

ボウウー

その木は焼けて炭化した。

何が起こったのか。それはもう明らかだ。

白姫は持っていた剣は刀身が青い炎で包まれた日本刀。

持ち手の部分には黄金の光を放つアクセサリのようなものが付いている。

美しい刃は見る者を魅了させ、青い炎と黄金の光はとても幻想的だった。

青く燃える刀を手に行っている少女の姿は、その刀をより一層美しく感じさせた。

「四剣之壺・焰薙！」

俺の役目は終わった。

後は白姫に任せて少し休もう。

ドサツ、と俺は地面に座った。

「命を差し出しなさい。そうすれば楽に殺してあげるわ」

「クク：クククク：」

「何？ 気でも狂ったの？」

サツクは笑っていた。

その笑い顔は本当に不気味だ。

「クク、まさか力を隠しているとはな。楽しくなってきたよ」
「そう、答えはノーみたいね。自ら死を選べばよかったのに」

「何を言っている小娘。貴様は俺の力を知らないのか？」

「知ってるわよ。この元ホームレスが大声で貴方の能力の説明をしてくれたおかげでね」

「それならわかるだろう。貴様の剣は俺には絶対に当たらない」

「そうかしら？」

「クク、戯言を。ならば、身をもって確かめろ！」

バチバチ

サックは消えた。

どこにいるのかなど、誰にもわからない速さで：

「龍宮。私の近くに寄って」

何をする気だ・・・白姫は？

言うとおりの俺は白姫の傍に行った。

「へえ、本当に見えないわね。なら、こうすればいいのよ」

「こうすれば？」

「いくわよっ！煉獄の炎！」

ドォーン

突然地面から、爆発音と共に炎が吹いた。

「ふふふ、まだまだよ」

ドォーン ドォーン

地面からの炎は止まらない。

いや、さらに勢いを増している。

炎は所かまわず吹き飛ばし、爆発音は凄まじいものだった。

「サック、死んでないなら返事しなさい」

「シ、死ネ！」

ガキン

サックは白姫にスタンガンで攻撃してきた。

それを俺が間一髪、螺旋剣で止める。

螺旋剣を受けたスタンガンは当然のごとく壊れた。

「ク、クソッ」

サックはもう人間の形をしていなかった。

腕や足は吹き飛んで消えている。

だがそれを闇の力が補っていた。

腕には黒い腕が、足には黒い足が存在した。

「お前は どうしてそこまでして生きようとするんだ？」

俺はついそんな言葉を出してしまった。

「ソナナコト、言ワナクテモワカルハズダ！」

もう声も人間らしくない。

すでに肉体も闇人化している。

「生かしてあげたいのは山々だけど、それは無理ね。貴方死んでるから」

「おい、そんな言い方…」

「だから、人間らしく死を選ぶか、地獄を味わってまた死ぬか。どちらか選びなさい」

これは白姫の二度目の忠告。

その答えにサックは……

スタンガンの残骸を拾ってこちらに向けた。

「そう、救いようがないわね。なら…」

白姫は剣を空に掲げる。

「地獄を見なさい」

ゴゴゴゴゴ

空から降ってくる無数の炎。

そして地面からも炎が吹き出る。

天地は炎に包まれ、それはまさしく…地獄のような光景だった。

————

戦いは終わった。

サックはすでに消滅し、リュックだけが世界に残された。

そのリュックも判別できないほどに焼けていたが…

ただ、名前だけはわかった。

佐久間翔太。

サック…か。

俺はきつとこいつを忘れない。

それがこの人間対する救いになると思ったから。

「何ぼっと座ってんの？家に帰るわよ」

俺はぼろぼろの体を無理して立ち、家に帰ろうと…

ドサッ

な…何だ？

頭がくらくらする。

足元がおぼつかない。

目もぼやけて…

「ちよっと遅い、って龍宮どうしたの！」

「だいじょう…ぶ…」

そんなことを言って、俺は意識を失った。

— — — — —

「ここは…」

目が覚めたらここは病院のようだった。

「やっと起きた。本当心配したんだから」

誰かが心配してくれるのはやはり嬉しい。

「怪我の具合はどうだったんだ？」

「腕の方はひびが入ってて最低でも全治一週間。頭は血が出てて三針くらい縫ったわね」

どうやらそこまでひどい怪我ではないようだ。

「そうだ龍宮、一つ聞きたいんだけど、いい？」

「どうした？」

「今思い返してみると変だなあ、ってことがあるのよ。」

ほら、私がサックに襲われそうになった時、龍宮が止めたでしよ。

見えない速度で移動しているサックをどうやって止めたの？」

「そうだな…声…かな？」

「声？」

「人は危機が迫ると体の神経が過敏になるらしいんだよ。」

だから、多分それで反応できたと思うんだけど…よくわからんわ」

「そうなのか。あ、そういえばまだお礼も言ってなかったわね。」

ありがとう、龍宮」

「いいんだよ。白姫も俺を助けてくれただろ。お互い様だよ。」

それにさ、助け合ってこそそのパートナーだろ」

「パートナー…それもそうね。これから戦っていきましょう。」

パートナーとして」

「任せろよ」

白姫は笑顔を見せる。

パートナー

その言葉でまた少し、白姫との距離が縮まるように感じた。

———

怪我は比較的軽かったので、俺たちはすぐに家に帰った。

怪我が軽くたったって無茶をしたら悪化する。

と言うことで、俺は一週間の休息を得ることになった。
その間の闇人は白姫が何とかするそうだ。
そして、暇な時間が空いたので、今まで見てきた剣を調べることにした。

・鬼切

白姫と最初に会った時に使用した剣。
鬼を切ったとされる剣で、鬼の呪いが込められている。
ただ、白姫が召喚するものは光の力となるため呪いは消えて
いるらしい。

現在はどこかの社に収められている。

参照・天下五剣

・デーモンの大斧

高位闇人を倒した斧。

巨大すぎて一振りしか振れないが、その威力は絶大。

・螺旋剣・鶴義

刀職人、鶴義が作った鑑賞用の剣。

戦いにも使用できる。

元はと言えば鶴義の妹の鶴姫が結婚する際に作ったとされる。
なので、二本の剣が螺旋状に渦巻くように作られている。

二つが分かれる仕様となっているのは鶴義の皮肉であろう。

現在は白姫の父のコレクションの一つ。

作者オリジナル

・焰薙

隕石から作られたと言われている幻の剣。

焼け野原となった村で発見された。

ほぼ全てのものが焼失したにも関わらず、これだけは無傷で

残っていた。

サックを滅したのがこの剣。

現在の所持者は、闇を破滅させるために生きているらしい。

参照・SIREN

・黒の剣

闇人が持っていた剣。

何なのかは一切不明である。

・名も無き剣

白姫の父の刀蔵の最深部にあった剣。

なぜか鞘が抜けない。

現在調査中。

・宇理炎

刀ではないが、焰薙に付いていた黄金に光るのアクセサリーの名前。

炎を操り、技を繰り出す。

煉獄の炎は地面を爆発させ、鉄の火は空から炎が降る。

恐ろしい力を持つ道具。

参照・SIREN

剣はこのくらいか：

次に人物

・龍宮浄化

りゅうぐうじょうか

主人公。

現在21歳。

性格は能天気だが勘は鋭い。

元ホームレスで公園で寝ていたが、闇に飲まれる。

ホームレス暦三年。

能力はなし。

名前の由来：浦島太郎「竜宮城」

SIRENで例えると須田恭也

・からすかしろひめ
烏靴白姫

どこかの家のお嬢様。

18歳の高校生。

性格はクールで少しボケる。

龍宮浄化を闇の世界に引きずり込んだ。

能力は現在この世界に存在している全ての道具を三つまで出すことが出来る。

ただし、複雑なものになればなるほど道具生成に時間がかかる。

能力名はサモン・アイテム

名前の由来：シンデレラ・白雪姫

SIRENで例えると美耶子

・つきかげこうえい
月影光影

月影兄弟の兄。

15歳の中学生。

悪魔を倒すため暗躍している。

今は強い味方を探している。

能力はまだ不明。

SIREN2で例えると三上修（大人）

・つきかげりゅうえい
月影龍影

月影兄弟の弟。

11歳の小学生。

言動が子どもっぽい。

性格も子どもっぽい。

でも能力は凄まじい。

能力はドラゴンを召還する。

能力名はサモン・ドラゴン。

SIREN2で例えると三上修（幼少期）

・さくましやうた佐久間翔太

闇の住人化した元人間。

白姫が勝手にサックと名付けた。

能力はダメージを受けたら攻撃力が倍増する、しかし防御力が落ちる。

能力名はダメージ・アップ

SIRENで例えると宮田

5 一週間の暇な時間

5 一週間の暇な時間

サックとの戦いから一日目

朝.. 飯を作った。食った。

昼.. 剣のことを調べた。

夜.. 寝た。

二日目

朝.. 部屋を掃除した。

昼.. 昼寝した。

夜.. 白姫が闇人を倒すところを見てた。すぐに終わった。

三日目

朝.. 散歩した。

昼.. ランニングした。

夜.. 長距離マラソンをした。

四日目

朝.. 剣のこと調べた。

昼.. 読書した。

夜.. 明日は何しようかなー、と考えてた。

五日目

「っておい。こんなんでいいのか？　いや良くない！」

「うるさいわね。何なの一体？」

「俺の一週間が嘘のように消えていく様なんて見たくねえよ」

「黙って見てなさい」

「いやだいやだー」

「子供？」

「どこか連れてってー。どこでもいいからー」

「ふう、しょうがないわね。今日はちょうど休みの日だし、どこか行きましょうか」

こうして五日目は、白姫と外へ出かけることになった。

――――

朝…都心に行くことになった。

バスに乗って一時間、着いた。

昼…鹿バーガーを食った。

図書館に行った。

服を買いに行った。

食材を買った。

家に帰った。

夜…満足して寝た。

「っておい！ほとんど前と変わってねえじゃねえか！」

「連れてってあげたでしょ」

「ああ、確かに！…じゃなくて！」

「もう、何をすればいいのよ？」

「ほら、図書館で何があったとか…」

「わかったわよ。はい、回想シーン入るわよ」

五日目・回想シーン

・図書館

「へえー、広いわね」

俺たちはまだまだ時間があるということで、図書館に来ていた。
まあ、名が無い剣の資料を探すただけだ……

「各自分かれて三時ごろ集まろうぜ」

「ええ、いいわよ」

――――

「駄目だな……」

やはり何も情報がないから、どこを探せばいいのかわからない。
剣をいってもたくさんある。

魔剣、聖剣など、他国の剣。

別に名が無い剣が日本のものだとは限らない。
だとしたら、世界中の剣を調べることになる。

「ハァー」

まったく、何で俺はこの剣に執着するんだろう？
こんなもの、そこら辺で適当に買った物かも知れないのに……
時刻は二時半か……
少し早いが白姫を探してみるか。

「見つかった？」

「ひゃう!？」

「図書館では奇声を上げてはダメって誰かに教わらなかった？」

「突然後ろに現れるんですもの」

「何で口調が女っぽく？まあいいわ、調べものが終わったんなら帰るわよ」

「ああ、わかったよ。あ、そういや白姫は何読んでたんだ？」

「最新の行方不明者リスト」

「……………」

「冗談よ…」

「やっぱりか！そうなんじゃないかとはすぐに思ったぜ！」

「図書館ではお静かに」

そして会話は終わった。

結局俺は白姫に翻弄された。

— — — — —

・古着屋

俺は路上徘徊者だから、服が無かった。

ちなみにこの服も三日間替えてない。

ということで、白姫の提案で古着屋にやって来た。

「3000円くらいで収めるわよ」

「3000円…高いな…」

「いや、安いくらいだけどね…」

「それじゃこれかな？」

俺が選んだもの。

それは…300円のズボンだった。

「安っ！！ よくそんなの見つけたわね」

「古着屋だからね」

「そんなもんなの？」

「そんなもんさ！」

買ったものはズボン3枚。

パーカーが3枚。

終わり。

小計：1500円。

「半額ですんだわね…」

「よっしゃもうけっ！」

チャリーン

龍宮は1500円を手に入れた。

— — — — —

・帰りのバス

「そういや白姫は服買わなくて良かったのか？」

「死ぬほどあるからいいわ」

「へえー、死ぬほど！」

「なるほど！ みたいに言わなくていいわよ」

— — — — —

・帰宅後

「白姫の着替えを見せて！」

「ふーん、貴方女装の趣味があったのね。知らなかったわ」

「違うわー！！」

「それじゃあ変態？私のパンツ被って、ひゃっほう、って騒ぎたいの？」

「何じゃそりゃー！！」

「それじゃあ何なの？」

「死ぬほどあるってどの位なのか気になって…」

「死ぬほどよ」

「だから死ぬほどって何なのさ？」

「そうね。私の服を全て覆い被さったら圧死するわね」

「なんだそりゃ？」

「死にたいなら見せてもいいわよ」

「え、マジか？」

「マジよ」

・白姫の衣装部屋前

「開けなさい」

「それはいいけど…何でそんな離れた所にいるの？」

「これ以上近づくと死ぬわ」

「へ、へえー…」

何だ？マジ…マジなのか？

でもここまで来て引き下がれない。

開けてやる！

「うおおおおおー！！」

ガシヤッ

開いた！

よしっ、何も起こらな…

ドドドドドドドドドド

滝…いや、雪崩が俺を襲った。

龍宮浄化…死亡。

———

「生きていて良かったわね」

「いいや…俺は一度死んだ」

俺はもう二度と白姫の衣装部屋を開けないことを心に誓った。

六日目

朝…服を新しく着てみた。

昼…違和感を感じた。

夜…服を返せと幽霊が現れた。

七日目

朝…歩いて都心に行った。

昼…服を返却した。

夜

「この一週間は日記に書いたし…寝るか。」

明日からは闇人の戦いに俺も加わる。

そんな大変ではないだろうが、恩を返すのが俺のモットーだし。

明日はどんな一日になるかな？

それじゃ、また明日。

6 罪人殺しの男

6 罪人殺しの男

俺は月影光影。

悪魔に勝つための味方を探している。

昨日は強い能力を持った少女と能力の持たない青年に出会った。
その次の日のことだ。

期待を持ちながら、今日も強い者を探していた。

そして、ある場所でその男と出合うことになる。

その男の第一声には驚いた。

「おい、お前ら：強いのか？」

三人しかいない闇の空間で確かに男はそう言った。
殺気を込めた低い声。

その声を聞いた瞬間、恐怖が全身を襲う。

弟の龍影はひどく怯えている。

だが、無理も無い。

男はそんな様子を見ながらため息をつきながら言葉を放つ。

「何だ：雑魚か。それなら消えろ！」

それは男が私たちに屈辱を与えるためのものだった。

雑魚は消えろ：と。

それに対して弟がやってしまった。

「ふ：ふざけるなー！ 僕は弱くなんかないー！ サモン・ドラ
ゴン！」

弟の声は震えていた。

恐怖を何とか怒りで押さえ込んでいるのだ。

そして、弟の能力が発動される。

次空は歪み、そこから白い龍が現れる。

神々しい光を放つドラゴン。

弟の怒りを力に変えた龍。

龍はその男に向かって雄叫びを上げる。

「ゴオオオオオオ!!」

「ハッハ、楽しそうな戦いになりそうだな」

それでも男は笑っていた。

人間なのかと疑うほどにその男は狂っていた。

生まれながらの戦闘狂。

それが俺たちの前にいた。

———

「ゴオオオオオオ!!」

龍は叫ぶ。

その叫びはさっきのものとは違う。

悲痛の叫びだ。

「つまらんな。こんなものか…」

この男：強すぎる。

最初から勝てるわけがない勝負だったのだ。

龍は傷だらけで倒れ、弟の精神は折れている。

だが、私は逃げることはできる。
私の能力、転移の力で：
しかし、最後に聞いておきたい事があった。

「お前、私たちと共に悪魔を倒さないか？」

「悪魔だと？ 強いのかそれは？」

「ああ、私たちの数倍は強いだろう」

「そうか」

「協力してくれるか？」

「いやだね」

男の答えは簡潔なものだった。

「な、なぜだ？」

「俺は俺より弱い奴には服従しない」

「本当に駄目なのか？」

「ふむ、そうだな。お前、面白い能力を持っているだろう」

「面白い？ 転移の能力ことか？」

「いや、あと一つあるだろう」

「気づいたのか？ 確かにある」

「やはりな。その二つを使い、罪人の所へ連れて行け」

「どうするつもりだ？」

答えはわかっている。

ただ聞いてしまったただけだ。

「叩き潰す」

「お前：自分が言っていることの意味がわかっているのか？」

「わかっていないと思うか？ 俺はただ強い奴と戦いたいだけだ。

満足すれば、協力しよう」

光影は深く考えた末：

「ふう、どうやらそれしかないようだな。わかった、協力しよう」

その男に協力することに決めた。

――――

暇な一週間が過ぎ、朝を迎えた。

「早寝早起き、健全なホームレスの嗜みですなー」

「あんたホームレス嫌いなんじゃなかったの？」

「おっと。ホームレス改め、路上生活者の嗜みですなー」

「ま、まあどうでもいいけど」

今日も一日が始まったのだ。

だが、今日ほど最悪な日はないだろう。

それをまだ二人は知らなかった。

――――

「この頃失踪事件が多発してるわね」

「急になんだ？」

現在時刻は深夜2時。

俺たちは焼け焦げた公園へ向かおうとしてるところだった。

「私はこの連続失踪にはわけがあると思うのよ」

「わけ？」

「闇人に殺された者は死んでもこの世界には帰ってこれない」
「つまり闇人に殺される奴が急に増えたってか？偶然だろ。」

まずこの件に闇人が関わってるなんていうのも勘違いかもしれないんだぜ」

「私にはわかるのよ。」

「もしそうだとすると、どうしても急に死亡者が増えるっていうんだ？」

「超強力な闇人が現れた。私はそう考えているわ」

「おいおい、冗談だろ」

「まあね。ただの推測に過ぎない。でも用心に越したことは無いわ」

「そうか。そうだつ、今日はこれを持ってきたぜ」

俺は名が無い剣を白姫に見せる。

「ハア…」

「何だその人を小馬鹿にしたようなため息は？」

「貴方私の話聞いてた？通常の剣は闇人には通用しないのよ」

「あっ！」

「あっ！じゃない。まあ、もうここまで来ちゃったし。ハア…」

気づけばもう公園に来ていた。

公園は焼け焦げている。

前の焰薙の炎のせいだ。

もちろん警察がきたようだが、事件性はないので二日三日で捜査をやめたようだ。

「もうどうでもいいわ。勝手にしなさい。」

「なんかすみません。」

「あー、もう。ブラックボックス・開！」

ドロドロと視界が塗り変わり、そこは闇の世界となっていた。

「そういや、この闇空間って誰かに見られたりしないのか？」

「言ってなかったっけ？この空間は強力な結界で出来てるのよ。

だから、外からは認識されない。そこに公園があるという事実さえ視えない。」

「んじゃ俺は？」

「龍宮はただの巻き込まれ人でしょ。貴方結構不幸ね」
「うるさいわっ！」

会話をしている間にも、黒い煙が人型を作る。

闇人が来た。

「弱いわね。一瞬で終わるわ。サモン…」

白姫がいい終わる前だった。

その男が来たのは…

ドゴ——ン

強烈な爆発音と共に闇人は一瞬で塵に変えられた。

「何だ!？」 「何!？」

闇人か!と思った。

しかし…違った。

「二人。いや、女がいるな…一人か。」

殺気の混じった低い声で、男はそう呟いた。

男の言葉は殺気に満ちていた。

何だこの感じは…

ただこれだけはわかる。

危険だ、あの男は危険すぎる。

「闇人じゃあないみたいね。でも油断しないでよ。」
「わかってる。」

白姫は冷静にそう伝えた。

「男は俺と戦えええ！」

男は雄たけびを上げる。

俺は身体が硬直して動かない。

「サモン・アイテム！」

すかさず白姫は敵と認識して剣を出す。

それは、刀身が真っ白な日本刀だった。

その刀の美しさは今まで見てきた中でも最高のものだった。

「白姫・嬉樹！」

「俺は女とは戦う趣味はないのだがな。」
「うるさいっ！」

白姫は刀を振り下ろす。
だが男は、微笑した。

「なかなか速いな。だが…相手が悪すぎたな」

バキバキ

剣がひび割れる音が響き、白姫は吹き飛んだ。

「大丈夫か！？白姫！」

白姫からの返事はない。

だが、あの音から考えて白姫は刀で防御したのだろう。

あの男が刀ごと白姫を吹き飛ばしたのだ。

だがおかしい。もし刀で防御したなら、男の手が切れていてもおかしくは無い。

俺は男の手を見る。

その右手には手甲をはめていた。

白銀で作られたシンプルな龍のデザイン。

なぜだかそれは光って見えた。

あれが能力だろうか？

「つまらんな。この程度か…いや、まだか。あと一人」

男は俺を睨みつける。

怖い…怖いすぎる。足が動かない。

それでも男には行かなければならない時がある。

俺の足は前へと出ていた。

「さあ来い！！楽しい戦いの始まりだ！」

勝てない勝負ということとはわかっているつもりだ。
だがなぜ足が進むのだろうか？

……

まあいい。本能に身を任せて戦うっていうのも悪くは無い。そしてまた一步、前に進む。

恐怖は消えず、感情はどこかに消えている。

ただ一步、また一步と男に近づいていく。

それは死に繋がるであろう道だ。

俺は何を考えているんだ？

…わからない。

ただ、驚くほど俺は冷静だった。

「さあ、剣を抜け。そして俺と戦え！」

男は叫ぶ。

それに対して、何の感慨も浮かばない。

ただ、剣を抜こうとした。

だが、やはり抜けない。

仕方なく、俺は両手で鞘付きの剣を握った。

そして、何も考えずに男に向かって行く。

ダン

剣は男に当たった。

男は避けようとしなかった。

「何だ、その蠅の止まったような攻撃は。俺を舐めているのか？」

男はかすり傷一つ付いていない。

そう…この気分だ。

これは…この気分は…

絶望だ。

もう俺は死んでいる。

肉体は死んでなくても心が死んでいる。

「つまらんな。本当につまらん。こんなもので俺の気は収まらない」

すると男はとんでもないことを言い出した。

「そうだ。女をお前の目の前で殺そう。そうすればお前も少しはマシになるだろう」

ぞわつと背筋が凍った。

白姫が…殺される。

スタ スタ スタ

男は白姫の元へ向かっていく。

「や…やめろー！！」

男の足は止まり、俺へと顔を向けてくる。

「そんなもので俺が止まると思うか？お前には女を守ることが出来ない。」

ただ、黙って死んでゆくのを待つだけだ」

そして男は静かにこう続ける。

「お前が本当に女を助けたいのなら…チャンスをやろう」
「チャンス？」

「そうだ。狂気を味方に飲まれ、俺を殺すことだ」
「!？」

狂気…それは闇。
俺がサックのように…

「俺を…闇人のようになれというのか？」

「その通りだ。ただとは言わん。あの女は助けよう」

「本当か？」

「俺は嘘は嫌いでな…」

例え嘘を言っていたとしても俺はそれを信じるしかない。

（狂気よ…俺に力を…）

闇の中、目を瞑りただ自分に語りかける。
自分の中の悪魔に…

（オマエ、本当に力が欲しいのか？）

（お前…誰だ？）

（何言ってるんだ？オマエは俺、俺はお前だよ）

（お前は…俺…）

（その通りさ。ただ存在が違うだけ。俺は悪、オマエは善、それだけの違いさ）

（なら俺の中の悪、俺に力を貸してくれっ！）

（本当にいいのか？オマエは戻って来れなくなるかも知れないぞ
？）

（いいんだ。俺のことは…ただ、白姫が無事でいれば…）

（ククッ、答えは分かりきっていたさ。俺はお前だからな。それじゃ、さようなら善の俺：始めまして：悪の俺）

ブチッ

そこで俺の意識は途絶えた。

6 罪人殺しの男（後書き）

悪魔は貴方の心の中にも潜んでいる。

7 白姫の覚悟

7 白姫の覚悟

男の目の前にはもう龍宮はいなかった。
いや、実際には居る。

しかし、目は赤く、顔は狂気に染まっていた。

「さあ、俺を満足させろ男！」

「やあ、初めましてかな」

「!？」

男が驚いたのも無理は無い。

今まで狂気に飲まれ、理性を保っていた者などいないからだ。
だが、すぐに落ち着きを取り戻す。

目の前の男の声は先ほどとは違い、氷のように冷たい声だった。

「何だ：お前は？」

「中の俺、それとも今の俺？」

「何を言っている？」

「まあそんなことどうでもいいんだよ。アンタはただ強い奴と戦
いたいだけなんだろう？」

「なら俺の存在なんて気にしないでいいんじゃないか？」

「ハハッ、確かにそうだな。始めようじゃないか」

「いいよ」

男はただ強い者と戦えればいい。そう思っていた。
だがこの男は何かが違う。

この余裕は何だ？そんな違和感を感じていた。

「来ないの？俺を殺すんじゃないの？」

「ふざけるなっ」

男は己の最高速で龍宮に近づく。

「なかなか速いね」

「何だその余裕は？俺を舐めるなあー！！！」

男の全力の正拳が龍宮を直撃し：

「もう、危ないよ」

たと思った拳は紙一重で避けられていた。

「次は俺の番だよ、カマイタチッ！」

居合いからの構えから風の刃が飛ぶ。

抜いた剣は龍宮では抜けなかったあの剣だ。

その剣は刀身に紋様のような跡が付けられている。

紋様の傷跡が風を生み、カマイタチを作り出す。

その剣は、古代に作られた風の剣であった。

男は剣との直撃は避けられたが風の刃を受ける。

男は両腕で防御し何とか致命傷は防いだが、もうその身体はボロボロだ。

「弱い、大口叩いてたわりには雑魚だね」

「オ、オ、オオオオオオオオ！！！」

男は恐ろしいほどの怒りの叫びを上げた。

俺は鬼島猿鳥。

よく犬が足りないと言われるが、そんなことはどうでもいい。
転移の能力を持ったあの男と会ってから、俺の罪人殺しは始まった。

ただ、女と子どもは弱く戦う価値などない。
たとえ能力が強くとも、その心は弱すぎる。
俺が少し力を見せただけで簡単に心は折れてしまう。
それでは俺の気は晴れない。

だが、本当の男は違う。

どんな力の差があっても勝とうとする強き心を持っている。

だが、それと同時に狂気にも飲まれやすい。

狂気に飲まれた者は狂人となり自己の失う。が、その一時の力は狂人前を遥かに越える。

そう。今まではそう思っていた。

だが、想像以上の存在が今ここにいます。

圧倒的な力の差。

許せない……この男の存在が……

だから今ここで、俺の最強の能力を見せよう。

「スリー・ライフレストリクション!!」

ライフレストリクション（命の制約）は自己の命を力に変える能力。

命を失う分だけ力が増す最強で禁断の能力。

だが、他人の命を使えば問題は無い。

能力はもう一つありそれは、他の命を奪う能力。

今まで殺してきた闇人になった人間の命を使えばいい。

命を三年使った。

この男は…必ず殺す。

「オオオオオオオオ！！」

「うるさいな」

音を越える速さで龍宮に近づく

ドコッ

音速を遥かに超える正拳は今度こそ龍宮に当たった。

「がっ」

龍宮は吹っ飛ぶ。

すぐに鬼島は追撃を仕掛ける。

龍宮は何とか受身を取り体制を直す。

そこに鬼島の回し蹴りが繰り出される。

ドン

それは鞘によって防御される。

攻撃はさらに続く。

腹、次に脇、最後に頭、それを全て反応して鞘で受ける。

しかし、鬼島の攻撃速度が速すぎて龍宮には剣を抜く時間さえない。

「やるね」

「其方こそな」

鬼島はこの状況を楽しみ、龍宮も余裕を見せ付けている。その間にも拳の速度は止まらない。だが、攻撃をしている鬼島の方がわずかに優勢に見える。

「でも、やられっぱなしはね。高速歩法・風足」

龍宮の能力で身体を少し浮かせ、その状態で鬼島の拳を受け風の如く遠ざかる。

「逃がすかつ」

「逃げる気はないんだけどね。カマイタチ・風鳥^{かぜどり}」

それはすでに風の芸術でもある。

標的に向かっていく風の鳥は左右にぶれていた。

そのぶれに正面から来る鬼島に回避する術はない。

風は視えない。だから風。

聞こえるとなれば音だけだ。

美しくもよく聞こえる鳥の声。

鳥となった風は鬼島を襲う。

「さようなら」

「誰に言っている？」

鬼島は風鳥に当てているはずだった。

それがなぜ…

「残像…か」

「ああ、さっきまでの俺はまだ3割の力しか出していない。そして今は6割だ」

「嘘だね」

「嘘だと思うなら試してやろう。これが…10割だっ！」

ドゴォ バキバキバキ

鬼島の拳は龍宮の全身の骨を砕き、龍宮は吹き飛んでいった。

「まったく久しぶりの登場だったのにな…後は…本物の俺に…任せろ…か…」

「今までで最高の戦いだった。またいつか戦いたいものだ」

決着は今ついた。

――――

「オオオオオオオオオ!!」

「うるさいな」

男の叫び声で私は起きた。

どうやら吹き飛ばされ意識を失ったようだ。

「何…あれ…」

龍宮は男と戦っているようだった。

けどなんだあれは？

速すぎる…強すぎる…あれは誰なんだろう？

龍宮…でも龍宮ではないもの。

龍宮は剣を振り風を生み出す。

そして、いつの間にか龍宮の背後に回った男に吹き飛ばされた。

バキバキバキ

龍宮から骨の碎ける音が聞こえる。

「龍宮！」

何も考えず私はすぐさま駆け寄った。

「大丈夫、龍宮！」

「ハハッ、力を求めた結果がこれか…ガハッ、笑えねえ…」

「何言ってるの龍宮」

「男ー！白姫は助けてくれるんだろー！」

「ああ、助けよう」

「なら…よかった」

その言葉に私は切れた。

「ハァ！？ならよかったあ！ふざけてんの？」

「は…」

「貴方自分の命犠牲にして人を助けることが格好良いとも思ってたんの？」

「は…はあ…」

「だとしたら世界一の馬鹿ね！」

「いや…だって…」

「貴方が居なくなったら誰が食事を作るのよ。龍宮が居なくなったら誰が私と一緒に食事を食べてくれるのよ！」

私はさらに言い続ける。

その目には涙が浮かんでいた。

「一人の食事は嫌だから。一人の生活は…もう…」

「白…姫…」

「だから…私が死なせない」

私は手を空に掲げる。

「私の命よこの剣に宿れ！」

これはただ一つの癒しの剣。

召喚条件は自分の命を削ること。

「四剣之弐・潮風！」

水色をした短刀。

それは刀とは到底思えないほど刃が欠けていた。

それは戦うための剣ではなく、人を助けるための剣。
奇跡、伝説が再現された古い短刀。

それを龍宮に突き刺す。

刺された短刀はどこかへ消え、龍宮の傷が治りだした。

「マジかよ…」

「四剣之弐・潮風。回復補助系唯一の剣よ。で…」

私は男を睨みつける。

「借りは返させてもらいましょうか。私の命と龍宮の命の…」

「ほう。いい目だ…やるか？」

「もう算段も覚悟もできてるわ。貴方を殺す…ね」

「おもしろい…やって見せろ女！」

私の戦いはこれから始まる。

8 勝敗

8 勝敗

私は今の状況を確認める。

凄まじい力を持つ男、傷を直した龍宮。

龍宮は体力的に限界で、今は戦えないだろう。

それに対して男にはまだ余裕がある。

そして、もう2回道具を作った私。

後1回しか道具は作れない。

どうすればあの男を倒せるのか…

考えろ…考えろ…

「行くぞおおお！」

男は突進する勢いでこちらに来る。

まずいつ！

ガキン

「まったく…少しは役立てねえのかよこいつは」

「龍宮？」

それは龍宮だったのか？それとも違う龍宮なのかはわからない。
だけでもそれは私を助けた。

「風壁^{ふうへき}！」

風は突風となり男を押し返す。

「まあただの時間稼ぎだな。俺じゃアイツには勝てねえ」
「貴方何者？」

「俺か？龍宮浄化だよ。悪い方のな」
「？」

「後は頑張れや」

バタツ、と龍宮は倒れる。

だが、風の壁は消えず男の進入を妨げている。

よくはわからないが時間は出来た。

そして、倒せるかはわからないけど方法も思いついた。

道具を生成する力は溜めている…あと少しあれば

あと少しで…あの男を倒す武器が出来る。

「くそっ、邪魔だあああ！」

人は軽く吹き飛ばされるであろう風だが、男は少しずつ歩みを進める。

「あと…少し…」

男はもうすぐそばまで来ている。

間に合うか…いや、間に合わせる！

「サモン・アイテム！」

「終わりだあ！」

男が攻撃に入ると、私が剣を振るのはほぼ同時。
そうでなければ私は死んでいただろう。

「炎よっ！」

ドゴン

男の真下で爆発が起こる。

男が近づいていたため、私も吹っ飛ぶ。

なんとか受身を取ったが身体は火傷と擦り傷で痛む。

「まだ、終わりじゃないわよね」

「当たり前だろう」

爆発はサツクの時使った宇理炎によるものだ。

だが、その爆発を受けながら男はほぼ無傷に近い。

「それが俺を殺す手段か？」

「まだまだ：鉄の火！」

天から炎の塊が男に落ちる。

それはまるで隕石のようにも思える。

だが、男はそれを受け止め、その炎は消滅した。

「嘘…」

「この程度か：やはり、死ね！」

「ふーん：誰が死ぬの？」

私にとって絶望的と思える状況は、その男の微かな油断に繋が
る。

私は最初からそれを利用するつもりだった。

確実に男の命を取るために：

ドスッ

「な…に…」

男にも何が起きたのか。

その事実はまったく分からなかったであろう。

なぜ自分が剣で貫かれたのか…

「リバース・アイテム。私は自分が出した道具を自分の手に戻す
ことが出来る。」

そして、道具の生成は3回まで。だから宇理炎の爆発を囿に使
って最初に出した嬉樹を使わせてもらった。

爆発が起きた時貴方の後ろに嬉樹を投げた。そして、私に戻る
剣は貴方を貫いた。ただ、それだけよ」

「やるな…ハッハ、俺がこんな小娘に一杯食わされるとはな…」

白姫・嬉樹はある呪いを持っていた。

それは一回だけ性別が男の人間を、必ず殺すことが出来る呪い。
それはたとえ刃が無くてもそれは男の身体を貫ける。

私は自分の使える精一杯の駒を使って勝負を決した。

— — — — —

「なんて人たちだ…」

月影光影は素直に驚いていた。

気配を消し、鬼島とあの二人の戦いを影から見ていたからだ。

圧倒的な力の差を押し返し、あの二人は鬼島に勝利した。

「あの二人…死なすのには惜しい存在ですね」

あそこまで強く、勇気のある存在。
きっと鬼島は氣に入っているだろう。
そして、きっと殺してしまうだろう。

「行きますよ龍影。あの二人を助けましょう」

「おーけー兄貴！成長した僕たちなら馬鹿鬼島にもきつとかてるよー」

「いや、鬼島さんを倒すわけじゃありませんから」
「そうなの…」

月影兄弟は戦線に踏み込んだ。

――――

「決着がついたのか？」

俺は自分のしたことを少しだが覚えていた。

悪となり剣を振るった記憶は白黒の映像で見え、俺が殺されかけた時の記憶は鮮明に残っている。

そして、今この状況はあの男の胴に剣が刺されているものだった。

「まだ貴方の命は尽きないの？」

白姫は冷たく言い放つ。

それに対して男は信じられない発言をした。

「確かに…一回は死んだな。だが、俺の命は尽きん！」
「な、何言ってるの…」

「俺の力、命の制約は他の命を奪う。そして、その命を犠牲にして力を得る」

「なっ！」

「この程度の傷……」

「そろそろやめましようよ。鬼島さん」

二人の間に場違いな声が突然響く。

それは中学生のような風貌の少年が発した声だった。

「光影か……何をしにきた？」

「鬼島さん。貴方を連れて帰るためですよ」

「戦いはまだ終わっていない！」

「いいえ、貴方は負けたんですよ。この人たちに」

「ふざけるなあ……！」

「とりあえずその傷直してさっさと帰りますよ」

「何なの一体？」

白姫はその状況に戸惑っていた。

学生服を着た少年は凶悪な男を連れていこうとしている。

「ちょっと待ちなさい」

「あ、お久しぶりですね。白姫さん」

「あ、貴方は……あの時の……」

俺たちはあの少年に会ったことがある。

それは俺と白姫が始めて出会った時だ。

「で、一体何なの？ 貴方たちは？」

「まあ落ち着きましょう。話はそれからです」

「私はいますぐにでも答えを聞きたいんだけど？」

光影は少しだけ、考えるようなポーズをとる。

「わかりました。いいでしょう、とりあえずこの闇の空間を消しましょう」

ピカッ

中心から光が放たれ、その世界は元へと戻る。

鬼島の傷はすでに直され、少年の傍には子どもが居た。

俺は闇から抜け出せたことに安心し、意識を失った。

9 悪魔と罪人

9 悪魔と罪人

気がついてみたら、どうやら白姫の家のベットに居るようだ。ばやけた頭でそのまま書斎から出る。

俺の頭は一気に目が覚めた。

なぜなら広間に出たら、俺を殺した男がいたからだ。

「はぁ！何でお前がここに！」

「落ち着いて龍宮」

「落ち着けるかよ！俺を殺しかけた奴が目の前に居るんだぞ！」
「すみません。すぐに話は終わりますから……」

怒りで我を忘れ、少年の存在に気がついていなかった。

どうやら、子どもいるようだ。

少年は冷静な対応している。

その態度に無理やり冷静になるように試みる。

「ふう。で、なんでコイツは俺たちを殺そうとしたんだ？」

「この人の力を借りるためです」

「どういう意味だ？」

「ええ、話せば少し長くなりますが……」

「いいから話せ」

少年はゆっくりとため息を吐き、話を始めた。

「まず、私の能力を教えます。私の能力は転移の力、だからそちらの闇の空間にも飛ぶことが出来ました。」

そして、二つ目が闇空間の創造と破壊です。これにより自由自在に闇空間を作り出すことができます」

「それとこの男の力を借りるのどう関係してるんだ？」

「話はこれからです。私はこの能力を使い、いろいろな場所へと行きました。そして、ある所で見つけたのです。悪魔を…」

「悪魔？」

「ええ、信じられないかもしれませんがいるんです。私が悪魔に干渉したことで封印に亀裂が生じてしまい、封印は軽く解けかけています。だから私は自分に責任を感じ、悪魔を倒すことを決意したのです。」

「お前一人じゃ倒せないから協力を頼んでる、ってわけか」

「ええ、私の能力は微々たるものです。実際、私は低級の闇人しか倒せません。その力を弟が補ってくれるのです」

「ああ、大体の話はわかった。だが、納得いかねえことがある。

それは…お前だ！」

俺は指を男に向ける。

「お前はなぜ俺を殺した？なぜ殺しに来た？」

「戦うためだ」

「はあ？」

「俺は…殺し屋だからな」

「はあ！」

俺と白姫は同時に驚く。

俺は半分あきれたような声で、白姫は納得したような声だった。

「俺は何人も人を殺してきた。だから、罪を背負うのも仕方ないだろう？」

「だからってそんなに簡単に人が殺せるのか？」

男の問いかけの意味はよくわからなかったが、人の命をなぜ軽く扱うのが理解できなかった。

「そうだな：求めるものは最強。弱い者には従わず、強い者と出会いたい新しい高みを目指す。それが俺の望む戦いだ」
「それだったら何でお前は弱い人を殺すんだ？」

殺し屋というのなら自分より弱い者を何人も殺してきたはず。
俺はそう思ったのだ。

「貴様に言う必要はない！」
「それじゃ納得いかねえ！」
「二人とも落ち着いてください！」

少年が止めに入る。

「まず二人の自己紹介くらいしないと話は進まないと思いますよ」
「俺は鬼島猿鳥だ。貴様も早く名乗れ、雑魚が」
「はあ？何だって？俺は龍宮浄化だよ！」
「龍宮浄化？ふざけた名前だな」
「お前の方がよっぽど変な名前だよ」
「何だと貴様、殺すぞ」
「女に負けたお前にやられるわけねえだろ」
「二人ともいい加減にしてください！」

またも少年が止めに入る。
龍宮と鬼島はまさに犬猿の仲、犬は龍宮で猿は鬼島と言ったところだ。

「話を最初に戻しますが、貴方たちに悪魔の消滅を手伝って欲しいのです」

「いいわよ」

その少年の言葉に対し、白姫は即答だった。

「えっ、マジで？」

そして俺は超困惑した。

少年と共に戦うとなれば鬼島も一緒ということだ。

「マジよ。悪魔には貸しがある。それを返すために……」
「？」

なぜ……と思ったがそれ以上は白姫の問題だと思ったので追求はやめた。

「協力してくれますか！ありがとうございます」

「だけど条件があるわ」

「何でしょう？」

「貴方の能力と悪魔について詳しく教えてくれない？」

「もちろんです。貴方には私と弟の新たな力もお話ししましょう」
「う」

「そう、よかった。せっかくだから家に泊まっていく？」

「そうですね。そうしましょうか龍影」

「賛成！」

「それじゃ、部屋に案内するわ」

白姫は月影兄弟と大広間を後にする。

残ったのは俺と鬼島だけ。

「おい、貴様はなぜ命を懸け戦う？」

突然鬼島はそんなことを言い出す。

「それじゃお前は戦いに理由があるのか？」

「罪を償う。俺たちが戦う理由はたったそれだけのはずだろう」

「人を殺してきた罪か？」

「ああ、多分俺はな。あの世界で戦う者は、皆何らかの罪を背負っている」

「どういう意味だ？」

鬼島は少し驚いた顔をする。

「知らないのか？ ブラックボックスは罪を犯した者にしか与えられない」

「なんだって！？」

「皆、罪を消滅させるために闇を滅している」

なんだそれ…

罪…

「ある者は窃盗を働き、ある者は人を騙し、ある者は人を殺す。そういう人間のリサイクルだ」

「何だそれ…でも、そうだったとしても人の罪を消すことなんてできるわけがない！」

ふう、と鬼島はため息をつき、静かに話し出す。

「確かにそうかもしれんな。だが、貴様はあの闇の空間が何なの

かわかるのか？」

「え…」

「あの世界はおそらく生と死の狭間だ。そしてそれは誰が創った仕組みだ？」

「誰…って」

「神か？悪魔か？それとも人か？」

創った者など絶対分かるはずがない。

鬼島はそれを知りながら言っている。

「つまりだ。俺たちには説明できないことがある。それだけで十分だろう」

意味不明な出来事だからこそ、その先にあるものを信じるしかない。

それが違かったとしても…

「全ては黒の魔術師の言葉から始まった」

「黒の魔術師？」

「罪人になった者は必ず出会う、神父服を着た老人のことだ。その老人は決まってこう言う「地獄へ堕ちるか？それとも罪を償い天国へ行くか？」…と」

「その老人は一体誰なんだ？」

「さあな？死神かもしれんし天使かもしれん。答えなどその老人に聞くしかない」

罪を消すと言う謎の老人…

一体何者なのだろう。

「もう一度聞こう。貴様はなぜ命を懸け戦う？」

「決まってるさ。恩を返すためだ」

「あの女のか？」

「俺は約束は守る男だ」

「フッ、ハッハッハ、本当におもしろい男だ！ますます気に入った」

「まあお前に気に入られても嬉しくないけどな」

「そうだな。俺は少々外へ行く。貴様も来るか？」

「行かねえよ」

「そうか」

鬼島はそれ以上何も言わず俺の前から消えた。

鬼島から得た情報は思ったより多かった。

罪人のこと。

黒の魔術師のこと。

そして、罪を消すこと。

白姫の罪が何なのか気になるが、時間が経てば話してくれるだろう。

俺はもう朝になりかけている空を見てから、寢床に戻った。

9 悪魔と罪人（後書き）

五月病 ごがつびょう

10 突然の訪問者

10 突然の訪問客

「もう昼か…」

もう昼となり、その頃やっと思が覚めた。

書斎から出てみても人ひとりいない。

白姫は多分学校へ行っただろうけど、他の奴は知らん。

俺はぼさぼさの髪を掻きながら昼飯を作ろうとした。

丁度その時だ。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴る。

この家に人が来た？

どうする…と一瞬考えたが、めんどくさいしここは俺の家ではないから無視することに決めた。

ピンポーン

ピンポーン

無視してるのになかなか帰らない。

玄関のドアに寄ってみたら、声が聞こえる。

「開けなさい、そこにいるのはわかってるんですよ！」

声色は女のものだ。

しかし誰がいるというんだ。俺のことか？

まあ、意味不明なことには巻き込まれたくない性質^{たち}だ。
でも顔だけは見ておこうと小窓を覗いた。
そしたらなんと、長くて白い髪をした美少女がいるではないか！
誰だか検討もつかないが、即ドアを開けた。
男なら当然の行動だ。

「何のようですか？」

そう、声は冷静に…落ち着け俺。
緊張していることに気づかれてはいけない。
ばれると俺のプライドが碎ける。

そして例えこの美少女が意味不明なことを言ったとしても「はあ!？」
」

などという口の悪いことを言うてはいけない。
それくらいの美少女だ。

「貴方、誘拐犯ですね」

「……………」

さすがは美少女…美少女は意味不明なことを言う相場は決まっている。

そう、俺は美少女を甘く見ていたのかもしれない。
さっきも言ったが意味不明なことには巻き込まれたくない性質^{たち}なのだ。

つまり、惜しい、超惜しいが、美少女より俺は平穩をとる。
さすがにまた面倒事は勘弁して欲しい。

「帰ってもらえますか」

「いやです。貴方が人質を解放するまで」

「私はそんなことしてませんから」

「いえ、しています。貴方には犯人オーラが渦巻いています」
「いや、だから」
「ホームレスは犯罪を犯すと相場が決まっています」
「てめえ、ホームレス馬鹿にすんな！」
「やっと本性を現しましたか。くるならきなさい。返り討ちに
てあげます」

ホームレスで俺は切れた。
ホームレスもちやんとともに生きている。
それを馬鹿にする奴はどんな奴でも許さない。
女に手を出すなんて男の風上にもおけない行為だ。
だが、そんなことより怒りの方が勝っていた。
そして、俺は美少女の手を掴もうとする。

ヒュ ドスン

だが、倒れていたのは俺だった。

「は？」

「女だと思って油断したから負けです」

「合気道…かよ」

俺は地面に叩きつけられた衝撃が大きすぎて俺は気絶した。

――――

「ハッハッハッハッハ」

馬鹿でかい笑い声で急に目が覚める。
笑い声の主は鬼島で、さっきの美少女もいた。

「そこにいたか、雑魚が」

「誰が雑魚だ！」

「女に負けた男だろ」

「ぐっ」

何か言い返したいところだが、本当なので言い返せない。

「なんなんだよ一体？」

「この女のことか？」

「急に來て俺を誘拐犯とか何とか意味不明なこと言って…」

「ごめんなさい」

美少女は俺に対して謝る。

これで許せない男は男じゃない。

「別に…気にしてないよ」

「ハッハッハッハッハ！」

「何だよおい！」

「地面に叩きつけられて気絶までしたのに許すか？馬鹿な男だ」

「馬鹿な男。クスッ」

鬼島の言葉に乗じて美少女も微笑する。

何？俺はめられたのか…

「我の名前は鬼島桃子、この男の妹なんです」

「はあ！！！！」

その「はあ！」は人生最大のものだった。

10. 5 気絶した龍宮

「合気道…かよ」

「いいえ、合気道ではないですよ…ってあれ？」

我は驚いた。兄を誘拐した犯人がこんなにも簡単に倒れた。おかしい。兄を倒したくらいだからそれなりに強いはずだ。この程度で気絶するような雑魚に兄は倒されない。

「あっ」

気づいてしまった。

これは誘拐犯じゃない。
間違ってやっちゃった。

「どうしよ…」

とりあえず目が覚めるまでこの家にいよう。
と、考え我はこれを運んだ。

「よいしょ、っと」

その屋敷はとても豪華な作りをしていた。
こんなホームレスみたいな男が住んでいい家ではない。
でもそんなことはどうでもいい。

事実が大切であって、真実は知らなくていいのだ。

がちやつ

ドアが開く音。

人が来た。

どうする我？

この男は明らかに不法滞在者。

そして我もこの男と共に疑われる。

それはごめんだ。

よし、気づかれないように殴り倒そう。

すたすたすた

歩いてくのを待ち伏せする。

いまだっ！

ダン

絶妙なタイミングでキックが人影に当たる。

「甘い！」

「なっ」

そのキックは手で止められた。

そして人影に吊るされる。

「桃子…か？」

「あれ、鬼だ！」

ドン

手が放され我は床に落ちる。

「いたーい」

「不意打ちで蹴りをいれる貴様に言われたくは無い」

さすがは我が兄、強い。

「で、なぜここにいる？」

「鬼が帰宅しないから心配してだよ」

「ちっ、面倒な奴だ」

「それは我のこと？ 我たちの親のこと？」

「どちらもだ」

兄は親の話をするといつも嫌な顔を浮かべる。

「でも良かったあ。ホームレスっぽい人が居てさあ」

また兄の表情が変わる。

それに構わず話を続ける。

「気絶させちゃった」

「フ…」

兄はふっ、とだけ言って…

「ハッハッハッハッハ」

と笑い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3075/>

闇の世界の物語

2010年10月11日03時29分発行